

こんにちは、今回の訪問看護の小部屋は

小田原地区の市民講座で紹介された、ご利用者様とご家族のエピソードと、訪問看護に頂いた言葉をお送りいたします。

「訪問看護 感動エピソード part1」

1・「人生の助手席に乗せてくれて
ありがとう」

終わりのなき治療の始まり。
副作用の辛さにも、
愚痴ひとつこぼさず4年間がんばったパパ。
がんと上手に付き合って生きてきたパパ。

“家でゆっくりしているのが
一番いい”

「人生の
助手席に乗せてくれて
ありがとう」

抗がん剤治療打ち切りを宣告された日。
“投げやりになんてならないよ、むしろ（人生の）
終わりがわかってよかった”と。
その声は弱々しいものではなく、
悲しそうなものでもなく、
どこか、ほっとしているように見えたパパの横顔。

「これから行きたい所に行って、会いたい人に会おうね」
と言うと、

“家でゆっくりしているのが一番いい。
いろんなことから離れて、
かえってストレスがなくなって
家に居るのがいい”
と言ってくれた。

そうだね・・・私にとって一番うれしい言葉なのかもしれない。

最後の父の日。
いろいろな願いも込めて、パパの好きなお赤飯を作ってお祝いした。
だけど・・・少しずつ体力がなくなっていくパパ。
頭ではわかっているけれど・・・それでも信じたい。
パパの力、生命力を。

パパ、ゆっくりでいいよ。できることを少しずつ。
きっと大丈夫！ まだ大丈夫！
1日でも長く、穏やかな日が続くようにと、今日も心の中で強く願う。



旅立つ10日前、緊急入院の日。
パパの体の中で、とても大変なことが起きていた。
とうとうこの日が来てしまった。
在宅医療の準備を整えてパパの帰りを待つ。



“車が大好きなパパ スカイラインが似合うパパ”

だんだんと小さくなってゆく息づかい、
呼吸が弱くなる・・・それでも私の声に一生懸命応えるパパ。
「パパ、ありがとう」
・・・パパの目に涙があふれた。泣きじゃくる私。
最後に流したパパのあったかい涙

“最期は家で過ごしたい”
車が大好きなパパ。
スカイラインが似合うパパ。
部屋には愛着のある星の数ほどのミニカーたち。
使いなれた物、聞きなれた音、家族の声。
たった6日間、されど6日間、無我夢中の6日間。

ひとつ屋根の下。

この家で、家族で見守ることのできるしあわせ。
寝起きを共にし、同じ物を見て、同じ物を食べて、
一緒に居られた喜び。
パパの気力の強さ、息づかいをそばで感じながら、
一緒に過ごした最後の空間。
だけど、刻々と変わっていくパパの状態に、
どうしようもなく襲ってくる不安と葛藤。

・・・ずっと忘れないよ。
最後まで自分の力でがんばろうとした男のプライド
・・・ずっと忘れないよ。
最後まで私の手を握りしめていたそのぬくもり
・・・ずっと忘れないよ。
人生も愛車もスピード上げて走り続けたパパ。



「向こうに行っても、その助手席は空けといてね」

2・「よし、 やってやろうじゃない
い！」

数年間入退院を繰り返し、痰の吸引や点滴があったため、奥様は言われた、
「とても自分に介護なんて出来ない・・・1日でも長く入院させて欲しい・・・」と。



入院するたびに吸引や点滴の指導を受け、
退院されても、すぐまた入院。
リハビリ病院に転院しても、すぐに退院を迫られる。

＜今後も同じことで入退院を繰り返すのは本人も奥様も大変な負担になります。
奥様の覚悟があれば、訪問看護は全力でサポートいたします＞
数日後、奥様は決断された。

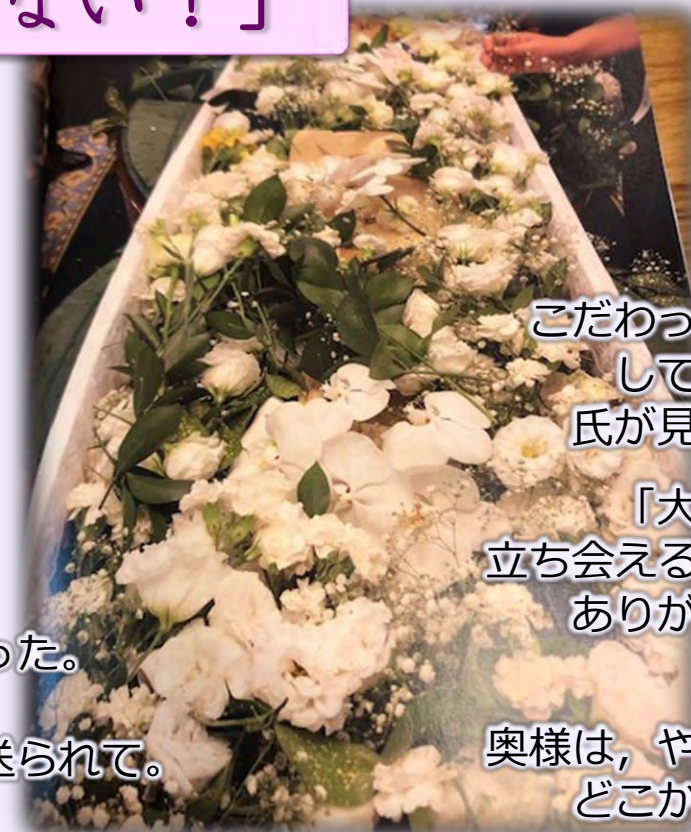
「私がやるしかないんですよ！
もう腹をくくります、支援願います！」

「よし、やってやろうじゃない！」

奥様のやる気はみなぎり、まるで新人看護師のよう。
必死にメモを取り、状況を細かく伝えて下さり、
吸引や点滴もこなされた。
まるで介護を楽しんでおられるかのようで、
まぶしかった。

全身状態は低下し始め、良くないと感じる日々が多くなる。
奥様は、状況を十分に理解されていた。

臨終の前日、ご家族全員集合。
今日は遅くなったから泊まっていくよ・・・
眠りにつくまでお話しされて…翌朝、意識はなくなった。
みんな傍にいるよ・・・
奥様、娘さん、息子さん、お孫さん、愛する方々に送られて。



棺の中は
こだわったお花でいっぱい
してあげたかった・・・
氏が見えないほどに・・・

「大切な人の死の瞬間に
立ち会える経験をさせてくれて
ありがとうございました」
と言われた

奥様は、やりきった満足感と、
どこか誇らしくも見えた。

3・「ご家族から訪問看護に いただいた言葉」

写真なんてちょっと恥ずかしいなと思いましたが、家で生きた証だし、私も頑張った思い出。

「出してください」と言いました。みなさんにも知って頂きたいです。往診の先生や、頼れる看護師さん、病院の看護師さんだって

相談に乗ってもらえるんです。自分の家だから、思うように時間を使って、ずっとくっついていられた。．．．病院じゃ人目を気にして頼ずりだって出来ませんものね。

自宅で本当に良かった。

死体なんて、気持ち悪くて近づけないと思っていました。

看護師さんが毎日来て下さり、体を拭いたり手足を洗ったり、髪の毛も

寝たまま洗ってもらって、口も毎日きれいにしてくれて。

亡くなった時には、何の抵抗もなく、思わず

「おじいちゃんありがとう」と抱きしめてしまいました。

家では、不安で不安で仕方ありませんでした。でも看護師さんが毎日来てくださり、身体の世話から、点滴や傷の手当てをどうしたら良いかまで、一緒にやりながら丁寧に教えてくれました。本当に助かりました。

ご家族から、訪問看護にいただいた言葉

とても不安でしたが、

「いつでも呼んでください」

と看護師さんに言われて本当に呼んじゃいました。

でも本当に、日曜日でも真夜中でも、嫌な顔一つしないで来て下さってありがたかったです。

．．．ごめんなさい。

いつもと違う事があると、直ぐに看護師さんに連絡します。

直ぐ見に来てくれて、先生や病院と連絡とって下さり、対応してもらえるので

安心して家で看られます。

「もう直ぐ呼吸が止まると思います。みなさんで身体に触れて、ここにいてからね、と声をかけて、安心させてあげてください。」

そう看護師さんは言って、その場からいなくなりました。呼吸が止まって連絡しようとしたら．．．玄関口で泣いていました。

最期の時を家族だけにしてくれたんだそう思ったら、ありがたくて思わず手を合わせて泣いてしまいました。

万一の場合に、
慌てて困らないように連絡先や言葉を書いた紙を用意して下さっています。
でも、いつも看護師さんに一番に連絡してしまいます。
夜中でも来て対応してくださるので
申し訳ない思いですが
感謝しています。

病院では、あまり具合を聞けませんでした、

看護師さんが来てくださり、
毎回 今日の具合やこれから
のこと、どんなことに注意
していたらいいのか、どうな
ったら連絡するのかなど
細かく話してくださるので
安心していられます。

どうなることか

と思いましたが、
看護師さんが毎日世話をしてくれて、異常があると先生に直ぐ伝わって。
先生から電話が来たり、
往診してくださったり、
本当に感謝しています。

ご家族から、訪問看護にいただいた言葉

亡くなるのが近くなった時、
毎日来てくださいました。
いつ亡くなってもおかしくない時には、一日何回も来て下さり安心でした。が申し訳ない気持ちで一杯でした。でも

「次は〇時に来ますね」
と言って、また来てくださるので、その時間を目標に頑張れました。

本当に感謝しています。

ウチのおじいちゃんは
頑固で人嫌いです。
だから言うこと聞いて
くれなくて困るんです。
でも、担当の看護師さんの言う事だけは
ちゃんと聞くのです。
なので、

「病院ではダメだ、
と思っています。」

私たち家族は病気を理解して
毎日を過ごしてきたつもりです。
自宅で最後をと思い、家に連れて帰ることはとても勇気のいる選択でした。
病院の先生、訪問看護師さん、
娘2人の毎日のケアの暖かさには
本当に感謝しております。
点滴や吸引、清拭など、みんなが力いっぱいできるだけのことをしてきました。

ひとりの力では在宅看護は無理です。
経験をした家族にしか理解できないかもしれませんが、
力になってくださる方がそばにいて、
本当に助かりました。

～終わりに～

私達のご利用者様、ご家族様の思いに、一緒に寄り添いながら支援させて頂いております。

ご協力頂きました、ご利用者様、ご家族の
皆様に感謝申し上げます。

～お知らせ～

まだまだすてきなエピソードがありますので、
7月頃に「訪問看護感動エピソードpart2」を
お届けする予定です。

ご意見、ご感想、今後取り上げてほしいテーマに
ついては《ホームページからのお問い合わせ》
からお願いいたします。

※お問い合わせ内容には「小部屋」とお書きくださ

い